

◆此の度、池田桂様のご逝去のお知らせが届いて吃驚しました。長い間お世話になってきたので残念です。在りし日のことが次々と思い出されてなりません。東日本震災を乗り越えて、福島の伊達市から、月一度の歌会・エッセイ教室のある後楽園での会場に、おみやげの菓子折を持ってここにこしながら通ってくださいました。走馬灯のように浮かんでくる懐かしい思い出を心にとどめながら、感謝の思いを込めて、ご冥福をお祈り申し上げます。

市川茂子

◆初めまして。布宮さんからお誘いをいただき今号から歌稿を出すことになったが心許無い。慈子さんの活動の礎になっている叔母様の歌人布宮みつこ氏はその出発に於いて、当山形の歌人・結城哀草果に師事したという。私が短歌を始めて以来所属している「山麓」の前身である。これも何かの縁であろう。

一九八八年、表現手段を持ちたいと模索していた時に声を掛けられたのが長井市の短歌のグループであり、その先生が「山麓」の当時指導的立場にいた人だった。前年、俵万智の『サラダ記念日』が出ていて短歌に新しい風が当たっていた。短歌の世界がどうなっているのか全くわからずに閉鎖空間に踏み込みそうで、せめて風穴をとという気持ちでNHKの通信講座も受講してきた。短歌らしいものをやっと数首作った頃にNHK学園の全国大会に出したものが岡井隆二十首選に入った。

バイト帰りの子の声に力ありてわずかなる送金も断りて来ぬ

自分の意志で横浜の新聞販売店で住み込みをしながら大学に行きだした息子が、通学に往復二時間かかる中で夕刊準備に三時には店に戻る日々では単位取得が難しいと二月で辞めた。それゆえに親に送金させることを苦にしていた時のこと。当時はバブルでテレビではディズニールランドに車で送迎する「アッシー」たちのお泊りデートが人気だった。そんな中で息子はこんな風に生きてるのだといいたかった。こんな字余りだらけのごつごつした歌を岡井隆が採ったことに驚いた。岡井は通信講座では洒落た、軽妙な感覚の歌を評価していたから。このことは歌の価値とか評価ということを考えさせてくれた。それから三十年余り、我ながら直球ばかり、皆さんの歌の世界にある、ちよつと違う風に当たってふくらみが出たらと願うが、もう無理だろう。先行き不安ながら、とりあえずよろしく願います。

梅津純子

◆昔、「名前を知るとそのものをじっくりと見なくなってしまう。黄色い花がタンポポだとわかると、それ以上見ようとしなないものだ」のような文章を読んだことがある。これは恐らく、趣深い随

筆の単なる導入の部分なのだが、なるほど思ったり、でもそんなことあるかなと思ったりして、不思議と印象に残っている。還暦を過ぎて数年、姉にいざなわれて地元山麓で山菜を摘む機会を得ている。周りの緑そのものが喜びだったが、名前を知ることによって山も植物も具体的に（血肉なんじゃないかと）見えて、春の山のなんとにぎやかで恵み豊かなものかとしみじみしている。新型コロナウイルスに過敏になる勤務中とのリセットが、とても贅沢な時間だ。

大橋千佳子

◆指導者のなかには戦争の比喩を好む人もいるパンデミックだが、そのなかでもう一年余りも不安や緊張がつづいていて、しかもそれが初めてということでもある。そんななかで、しる人のなかでは近い人、同人の池田さんがなくなつた。池田さんのことでは、同人らで奥多摩を小旅行（一泊）したさいに、池田さんと二人で同じへやに休んだことが、記憶のはじめのようになっていて。じぶんにとってその小旅行がひさびさの閑だったことは、そのあとではとくにハッキリとした。ものいいのやさしい人である。エッセイ教室で多く隣席、そのときの姿やふるまいが、声とともに今も近くに残っている感じがある。

小野澤繁雄

◆田んぼに水が入ったかと思つたら、いつの間にか田植えが終わり、夏が駆け足でやって来た。この時期は、体が反応するとか食い意地が張つていっているとか、どうしても冷たいものを欲しがつてしまう。素麺、冷やし中華、みんなに食べさせてやりたい山形の冷たい中華。今は無性に酢のきいた心太を啜りたくなっている。「心太口に松葉の醤油さし」

神村ふじを

◆今年24年ぶりのスーパームーンの皆既月蝕が日本で観察できる、次は12年後と言われれば、私にとって、今生最後のチャンスである。東南に開いている二階の出窓に陣取つて、7時ころから南側の家の前の通りに入る月を待った。結末は、空振りであった。「朝日新聞宇宙チャンネル」も月蝕の説明で終わり、翌日の朝刊にも第一面を飾ることなく、左中段の記事であった。

河村郁子

◆先週あたりから、夏らしい天気が続いている。今年の五月は天候が不順で、肌寒い日が多かった。スイスは梅雨がないので、六月は気持ちのいい季節である。夏時間ということもあって、夏至に近い今は夜遅くまで明るい。コロナワクチンの接種も進んで感染率も下がり、数週間前からレストランも再開。用事があつて、久しぶりにチューリッヒに出た。ちょうどいい天気で、人々が屋外席でワインなどの飲み物を手に、お喋りを楽しんでた。このまま感染が落ち着いて、良い夏となりますように。

ギンジツク恭子

◆本誌前号に布宮さんが編集後記で比叡山浄土院侍真の渡辺光臣氏が十二年籠山行のことを話題に

していたこともあり、今回の〈近江気まぐれ文学抄〉光永覚道著『千年回峰行』が決まった次第である。山形に縁のある比叡山の高僧二人が、比叡にいますと思ふと、滋賀居住の私も少なからぬ縁を感じているところです。また、根本中堂にある法灯が信長の焼き討ちによって消されたとき、天台座主三世慈覚大師円仁によって開基された山寺立石寺の法灯をもらい受け再び灯したという。滋賀と山形は、決して近い距離ではないが、どうも仏縁は近くて、かつ深いようだ。

新関伸也

◆冬季の農産加工の仕事で首、肩、腕がガチガチに硬くなり何とかしたいと、友人のヨガ教室に通うことにした。ある時彼女に「ナンバ」について尋ねたところ、知らないという。武術の実践研究者である甲野善紀の『身体から革命を起こす』をお貸ししようと、本棚から取り出してばらとめくってみた。「昔の日本人は仕事や修行において、よしとされたのが、より支点のない動きだった。支点とは、自分にとっての拠りどころでもある。意識は、生きて動いているなかには存在せず、そのなかに滞って動かないものを見出す作用として現れる。流動するものを概念によって固定化することで、意識は自己として自らを確認するのである。（中略）近代以降の日本では、そうした姿勢をよしとする傾向が強まった。しかし、かつての日本人は、そのような自己の実感を消し去ってゆくことを、よきこととしたのである。概念化を強固にするにすぎない自己確立よりも、生きてあることに価値をおいたのだ」「流れるものと、ふんばるものと」。長い引用になったが、前

に読んだ時は全く見逃していた一文に瞠目させられた。身体の使い方を変えれば思考も変わるのだ。金子兜太の「海とどまりわれら流れてゆきしかな」の句が、ふと浮かんだ。

新野祐子

◆ここ半月ほど、新型コロナウイルスのワクチン接種をしてもらうにあたり大騒ぎしてしまった。まず私が住んでいる地区の集団接種会場で接種してもらおうと思ひ、電話の前に坐りこみ、地区が指定する申し込み番号に電話をしたが、何回かけても、「ただいま電話が混み合っております。しばらくたつてお掛け直してください」と言われるばかりで、まるでつながらない。その後、集団接種会場より少しおくれるが、近くの開業医でもやっていたことになる、そちらに申し込んで一件落着した。それにしてもまったくおかしな病気がはやってきたものである。

松井淑子

◆高校生になった息子・ハルから、「ママのレシピ本がほしい」と頼まれ、イラスト付き献立のレシピを書き始めた。休みの日に一つ書けるかどうかという遅々たる作業だが、休日の楽しみになってきた。最初のページは母・布宮みつこの味「紫蘇と胡桃のごはん」。刻んだ紫蘇と胡桃をご飯に混ぜ合わせるだけの簡単さだが、私が小学生のときの運動会や遠足のお弁当は必ずこの混ぜご飯のおにぎりと決まっていた。今でも、ここ一番のがんばり時には、紫蘇と胡桃のおにぎりを握る。レシピを書くほどでもない献立ばかりだが、書くうちに、自分一人で作っている気になっていたが、

美味しく食べてくれる家族がレシピを磨いてくれることに気がついた。毎日のご飯と家族に感謝ですね。

山内裕子

新会員紹介

梅津純子（うめつ すみこ）……一九四三年（昭和十八）、東京生まれ。翌四四年、空襲が迫り父の実家のある宮城県登米郡錦織村（現登米市）へ移る。一九六一〜六九年春、仙台市にて銀行勤め。六九年、結婚により米沢市へ。七一年より長井市在住。所属は山形県歌人クラブ、山麓。歌集に『風の旅』がある。